

自然的ランドマークとその要件

津 川 康 雄

The Important Matter of Natural Landmark

Yasuo TSUGAWA

The natural environment is a vital and influential element in the formulation of human nature. Natural phenomena and the elements have a direct and indirect affect human nature. They indiscreetly govern human behaviours through the five senses and continually aid towards their improvement. Living within the natural environment, with various levels of emotion, people perceive various colors and segments of the landscape composed of natural phenomena and elements.

This paper on the landscape within the natural environment investigates the elements of the natural landmarks and their importance. As an example, high school songs in Gunma prefecture are singled out to study how the natural landmarks become included in the regional images, what the important aspects are, and what the regionality is. In conclusion natural elements found in most school songs meet the requirements of a natural landmark. The surrounding natural and human environment describes the absolute and relative geographical position of the school, which contribute to solidifying the school's identity.

- . はじめに
- . 自然的ランドマークの要件
- . 校歌に歌われる自然的ランドマーク
 - a . 校歌と自然的要素
 - b . 校歌と山
 - c . 校歌と河川
- . おわりに

I . はじめに

自然環境は人間にとって生命を維持するための基本的要件であると同時に、様々な自然現象や自然的要素が人間の生活に直接・間接に作用し、五感を通じて人々の行動を規定したり、感性を高める働きを促している。人々は日々、自然環境に身を委ねながら自然界の諸現象や諸要素によって形成される景観に対して、種々の色や形を認識し、多様な感慨を抱きながら生活を営んでいる。また、人間は能動的に自然環境に働きかけ、社会・経済生活を営んでいる。そこには、少なからず自然環境との共存意識が存在し、知覚空間としての自然環境を背景に人間の行動空間が規定されてきたのである。

世界では、産業革命以降、工業化の進展に伴い自然環境への負荷が高まり、環境破壊を引き起こす例も少なくなかった。こうした傾向に対して、自然環境の保全や回帰を通じてその重要性への認識が高まり、国連のユネスコによる世界遺産（自然遺産など）の指定、イギリスからはじまるナショナルトラスト運動、ラムサール条約による湿地の保全などにみられるように、世界各地で貴重な自然環境・景観の保全意識が高まっている。これらの大半が、人々の知覚に対して共感・感動の得られる対象であることは言うまでもなく、地表面における自然的ランドマークとして認識できる存在ともなっている。

日本の自然環境においては、国土の大半が山地によって占められ、湿潤な気候が多くの降水量をもたらし、数多くの河川が河谷を刻み、沖積平野をはじめとする各種の地形が形成されてきた。また、火山の存在が湖沼とともに風光明媚な景色を形成することも多い¹⁾。こうして、日本固有の風景・景観が生み出されてきたのである。このような自然環境に対して、奈良時代、朝廷の命によって諸国の自然や人文諸事象を把握するために「風土記」が編纂され、古くから地域構成要素としての山川草木に対する認識が高まった。中国や日本において山水画が発達してきたことなどにも、自然的要素としての山や河川の果たしてきた役割を確認することができる。山に対しては、自然崇拜を前提とした畏怖畏敬の対象として各種の信仰・修行の場と結びついてきたし、河川に対しては、単なる自然構成要素にとどまらず人々の生活と密接に結びつき、飲料水の確保、交通路などに利用されてきた。また、山地や河川は人々の物理的障害として認識されることもあり、国境や都府県・市町村界等の行政界として利用されることも多い。全国各地に分布する三国山に代表されるように、位置が示される境界点として機能する例も多々認められる。また、“物見遊山”に代表されるように自然的要素と観光とが結びつき、人々の生活に潤いを与える対象ともなり、近年では余暇時間の増加に伴い、グリーンツーリズムといった形で自然との触れ合いを強く指向する人達が増加している。

自然的要素は地域イメージを確定したり、人々のメンタルマップを形作る上で重要な働きを成す場合もある。たとえば、京都では頼山陽が用いたとされる“山紫水明処”が端的に京都のイメージを喚起する²⁾、数多くの唱歌を作詞した高野辰之³⁾は“兔追いしかの山…小鮒つりしかの川…”

と故郷の山河を唱い、群馬を代表する詩人萩原朔太郎は“わが故郷に帰れる日 汽車は烈風の中を突き行けり ひとり車窓に目醒むれば …… まだ上州の山は見えずや「帰郷（敷島公園詩碑）」”と故郷への帰省に際し、行く手に故郷の山の姿を追った。自然的要素は人々にとって地域イメージを確定する際の基本的要件にもなり、おびただしい芸術作品の中で多種多様に取り上げられてきた。

本稿では自然環境における景観の分析に際して、その構成要素である自然的ランドマークの諸要素を吟味し、その要件がいかなるものであるかについて考察を試みた。その際、多様性に富む自然環境の中から、主として地表面における自然的要素として欠かすことができない山や河川を取り上げ、それらが人々の地域イメージ確定に取り込まれるプロセスやその要件、ならびに自然的要素に認められる地域性などについて確認してみた。具体的には、群馬県の公立高等学校の校歌を取り上げ、その歌詞に盛り込まれている各種の自然的要素を抽出し、分類を試みることによってその目的を達成しようとした。言うまでもなく校歌は作詞家・作曲家の意図が強く反映されるものの、当該校を取り巻く自然・人文環境を歌い込むことによって、在校生はもとより卒業生に至るまで、数多くの人達のアイデンティティ形成に結びついているものと考えられるからである。

Ⅱ．自然的ランドマークの要件

ランドマークはリンチ（Lynch・K）により、都市のイメージ構成に果たす役割の分析が知られ、それはある構造（structure）における認識対象（identity）であると説明されたものである⁴⁾。しかし、ランドマークは単に人文的な要素にとどまらず、自然的要素にも確認可能な認識対象と言えよう。自然環境を構成する要素には、地形・気候・植生・土壌などがあり、地球上、多種多様な環境のもとで人文的要素とも関わりあいながらさまざまな景観が形成されている。このような景観構成要素の中に、ミクロからマクロに至る多種多様な自然的ランドマークが内包されている。言い換えれば、ランドマークは地理的空間における自然的・人文的景観構成要素であり、象徴性・記号性・場所性・認知性などの諸特性によって支えられ、人々の空間的座標軸に象徴的に位置づけられる存在である^{5・6・7・8)}。すなわち、地理的空間に存在するものの総体に人文的・自然的ランドマークが包含されているものと考えられることができる。

一例として、自然的ランドマークの諸特性を富士山を例に考察してみよう。

- ・富士山は火山として何度も噴火を繰り返し、溶岩がその都度流出し、均整のとれた成層火山となった【内的営力による形態・色彩の成立】。
- ・それは3,776mの高さを有し、日本の最高峰である【物理的高度・記号性】。
- ・日本を代表する山であり、日本のシンボルとして位置づけられ【象徴性】、四季折々の風情や雪をいただく独立峰として陸・海・空の幅広い地点からよく認識でき、各地に“富士見地名”が成立した【認知性・視認性】。
- ・富士山の山頂はかつて甲斐・駿河の国境を示す位置であり、現在の山梨・静岡の県境ともなっ

いる【場所性・記号性】。そして、日本各地に富士山との共通性が見出された山の山名に富士の名称が用いられ、江戸時代には富士講が盛んになり、信仰を伴う富士登山が盛んになり、各地に代参の場として富士塚が設けられた【象徴性・宗教性・イメージの伝播】。

- ・象徴的・美的な対象として、江戸時代の安藤広重や葛飾北斎の描く浮世絵などにその姿を確認することができる【文化・芸術性】。

こうして富士山は日本人のみならず、諸外国の人々にとって日本を象徴するイメージとして定着し、シンボリックな自然的ランドマークになったのである。そして、美的な姿と周辺の自然は1936年に国立公園に指定され、保全とともに多くの人が訪れる観光地となった。そこには、認知・記憶の蓄積や情報の伝播等により、景観に特別な意味が付与されたり、シンボル化されることにより、社会的イメージへと昇華・定着していく。このように、自然的ランドマークは社会的認知度の多寡はあるにせよ、多様な特性が内包されているものと言えよう。

富士山に限らず山はランドマークとしての基本的特性を備えている。すなわち、色と形が明瞭に示され、短時間のうちに山の位置が移動することもほとんどないため、人々の認知対象として利用されることが多い。人々は山を認識するために、動植物、神仏や方位を山名につけるなどしてきた。また、漁労に従事する人達も漁場の確認や天候の予測に山を利用してきたし、農耕者が雪解け時に山の斜面に現れる雪形を見て耕作時期を判断することもよく知られている。言い換えると、人々にとって山は様々な関わり方があるにせよ、地域シンボル、ランドマークとして位置づける例が多い。

また、河川は山地部を流れる過程で谷を削り、平野を形成していく。空間的には樹状(デンドロ)形態を取ることが多く、接点に谷口集落、落合集落が形成されたり、河川沿いが交通路となることも多い。したがって、河川は線的な連続を通じて方向性が認識されたり、合流点が分岐点ともなっている場所性が示されるのである。また、河川に架かる橋は典型的なランドマークであり、人々の注意機能が強く集中する地点となり、河川を認識する上でのアクセントにもなる。

以上のように、ランドマークは広義にとらえるならば、地理的空間に存在する色や形あるものの総体に包含されていると言えるが、形成の過程には大きな差異が認められる。すなわち、人文的ランドマークと自然的ランドマークとには、その形成過程に大きな相違がある。人文的ランドマークが人間が社会生活を営むなかで築き上げてきた政治・経済・文化活動の所産であるのに対して、自然的ランドマークの形成は、自然の力が作用し、内的営力(内作用)、外的営力(外作用)の所産であり、人間の力が介在する余地はきわめて少ない。自然的ランドマークの形成は、偶然の所産ともいべき力が作用するのである。

Ⅲ．校歌に歌われる自然的ランドマーク

a．校歌と自然的要素

言うまでもなく、校歌は校風を発揚するために当該校の生徒や学生によって歌われるものであり、

著名な作詞・作曲家はもとより、校歌制定委員会といった場で制定されることも多い。校歌は学校行事など、事ある度に歌唱され、在校生のみならず卒業生へも記憶の蓄積が図られていく。いずれにしても、歌詞に当該校を取り巻く自然・人文環境を読み込み、希望あふれる未来を示唆する内容が多い。それは、校風発揚という目的を満たすとともに、生徒・学生に対する記憶の刷り込みが行われていると見なすこともできる⁹⁾。

そこで、実際の校歌の中で、自然的要素がいかに取り込まれているのかを群馬県の公立高等学校を例に分析することにした¹⁰⁾。

まず各校の校歌に歌われている自然的要素を山（名）、河川（名）、植生（名）、自然現象、その他（地名等を含む）に分類してみた（第1表）。それによると、山（名）を歌詞に含む学校が67（90.5%）、以下、河川（名）55（74.3%）、植生（名）46（62.2%）などとなり、大半の学校が自然的要素として山（名）、河川（名）、植生（名）を歌詞に取り込んでいることが明らかとなった。数多くの山地を抱え、多数の河川が平野を流れ、恵まれた植生が景観形成を促す群馬県の地域特性が強く反映されていることが明らかになった（第1・2・3図）。

ちなみに、山（名）では赤城山33校（36.7%）、榛名山17校（18.9%）、上毛三山7校（7.8%）、妙義山6校（7.8%）の順となり、赤城・榛名・妙義といった上毛三山が取り上げられる例が多い。上毛三山が群馬県民の共通認識の対象として捉えられていることが明らかになる。言うまでもなく、三つの山がそれぞれ特徴的な形態をもちながら聳えていることや、山岳信仰の対象として、また、レジャーの拠点として数多くの人々との関わりをもってきたことがその背景にあるものと考えられる（第4図）。

河川（名）では利根川が29校（49.2%）に出現し、^{かぶら}鍋川5校（8.5%）、^{からす}烏川、^{かんな}神流川、渡良瀬川がそれぞれ4校（6.8%）となる。やはり、利根川が圧倒的に多くの学校で歌われており、群馬の自然的骨格としての認識がなされているものと言えよう。ちなみに利根川は大利根、坂東太郎、刀寧などと言い換えられることも多く、作詞者の感性により直接的表現が避けられている例も多々認められる（第5図）。

植生は山や河川と比較すると、多様であり、花（花・野の花）、松（松・若松・小松）、木（木・樹・木々）、草（若草・春の花）などの一般的な植生が歌われ、同時に、群馬県のイメージや地域イメージと重なる櫟、桑・桑の葉、梅、桐、つつじ、水芭蕉、藤、麦などが用いられている。たとえば、尾瀬高校（水芭蕉）、藤岡高校（藤）、安中高校（梅）、館林高校（つつじ）といった地域イメージと二重写しになるような形で用いられることも多い。また、高校生の若々しいイメージを強調するように、若草・若松・若葉・早苗を使用する例が多い（第6図）。

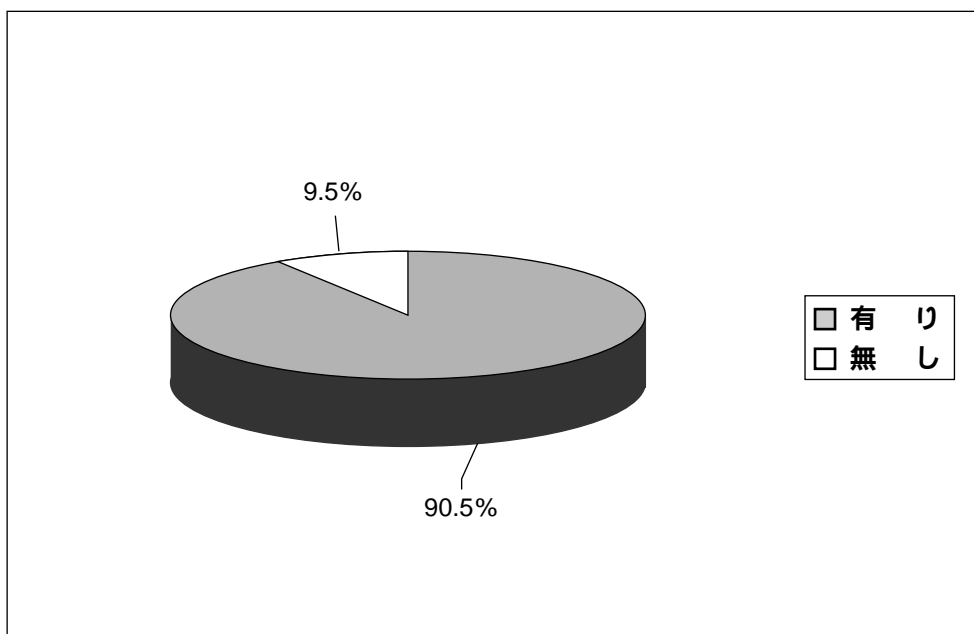
自然現象では光・太陽光、風・朝風、雲（朝雲、青雲、白雲...）、空（大空、あさあけの空）、春夏秋冬・四季・季節、天・天空などが出現数の上位を占めている。学校を取り巻く自然界を象徴的に表現するとともに、希望に満ちたポジティブな明るさや力強さ、澄み切った清純さ、四季の移ろいなどが表現されている。校歌という制約はあるにせよ、作詞家は自然の壮大さや変化を表現する

第1表 校歌に歌われる自然的要素(群馬県公立高等学校)

学 校 名	地域	山 (名)	河 川 (名)	植 生	自 然 現 象
沼田高等学校	北毛	赤城山・武尊	川	桔梗・木の葉	三國おろし・吹雪
沼田女子高等学校	〃	赤城嶺	利根川		
利根実業高等学校	〃	赤城・武尊・谷川	大利根(利根川)	桑葉・洋梨・黒松	
渋川高等学校	〃	榛名	大利根(利根川)	大樹	天・光
渋川清翠高等学校	〃		せせらぎ		緑の風
渋川女子高等学校	〃	赤城・榛名	大利根(利根川)		春・水
渋川工業高等学校	〃	赤城嶺	利根		大空・宇宙
中之条高等学校	〃	榛名山	吾妻川	種子	彩雲・あけぼの・水・光・靑空・流星
吾妻高等学校	〃	青垣山・岩櫃	吾妻川	樺	豊旗雲・陽・風雪・天
長野原高等学校	〃	浅間・白根	吾妻川		日輪・光・風
嬬恋高等学校	〃	浅間山		草木・花	空・霧・風・紫雲
尾瀬高等学校	〃	武尊の峰(武尊山)	片品川・利根	水芭蕉	風・四季
利根商業高等学校(組合立)	〃	谷川岳	坂東太郎(利根川)		陽・白雲・靑空
高崎高等学校	西毛	赤城山・榛名山・上州の三つの山	烏川(かわ)	バラ	雲・風・天・日輪・堅雪・風
中央高等学校	〃	火の山・榛名山			春・夏・秋・冬・雲・雪・太陽光・赤城風
高崎東高等学校	〃	三名山	井野川・利根	樺	春・秋・風・月・天
高崎女子高等学校	〃	榛名の山	大利根(利根川)	花	
高崎工業高等学校	〃	赤城・榛名			
高崎商業高等学校	〃	三山			水・光
藤岡高等学校	〃	三山		藤	天・春秋
藤岡女子高等学校	〃	御荷鉾の嶺	神流の流れ(神流川)	松	
藤岡北高等学校	〃	御荷鉾・赤久縄	神流川	種・花	嵐
藤岡工業高等学校	〃		神流の流れ(神流川)		空・光・水・蜩雪・靑雲・天
富岡高等学校	〃	妙義嶺	かぶらの流れ(鍋川)	みどり葉・楳の木	ひかり・あさあけの空
富岡東高等学校	〃	妙義	鍋川	稲・小松	靑雲(あおくも)
富岡実業高等学校	〃	赤城嶺・榛名・妙義	鍋川	若草・花	朝のひかり・春秋・雲・風
安中高等学校	〃	三山(みやま)			光
安中実業高等学校	〃	妙義	碓氷川	梅	春・雲・秋・風・虹
榛名高等学校	〃	榛名	烏水(うずい)(烏川)		光
高崎北高等学校	〃	榛名嶺	大利根(利根川)		靑空・天・ひかり
吉井高等学校	〃	連なる山	鍋の岸(鍋川)		天・空・水
万場高等学校	〃	御荷鉾山・赤久縄	神流川	麦の芽	靑空・風花・春
下仁田高等学校	〃	荒船	湫川・鍋の川(鍋川)		雲・こだま
松井田高等学校	〃	妙義	碓氷川	若草・花	霧・光・星・水・空・雲
高崎経済大学附属高等学校(市立)	〃	榛名	烏川(ながれ)		光・風
前橋高等学校	中毛	山	刀寧(利根川)	花・桑・松	赤城風
前橋南高等学校	〃	赤城(赤城山)の裾	大利根(利根川)		夕暮・朝霞・空・靑雲
前橋東高等学校	〃	赤城(赤城山)の裾野		若草	朝風・大空・星
前橋西高等学校	〃	赤城の嶺			光・天空・雲・風
前橋女子高等学校	〃	赤城嶺	大利根(利根川)	桜・花	光・風・大空
勢多農林高等学校	〃	赤城嶺・榛名	大利根(利根川)	早苗	天・朝日・雲・月・風・光・夏・雨・秋
前橋工業高等学校	〃	赤城の山・榛名の山	坂東太郎(利根川)	八千草・紅葉	光
前橋商業高等学校	〃	赤城の高嶺	利根の流れ		雲・光・風
前橋清陵高等学校	〃	赤城・伊香保嶺(榛名山)	利根	木・白百合・花	水・夕嵐
伊勢崎東高等学校	〃	赤城		芝	陽・靑空・雲・夕空・星・蜩雪
伊勢崎女子高等学校	〃	赤城・榛名		花	空
伊勢崎興陽高等学校	〃	山脈(やまなみ)	瀬の流れ	樹・木々	空・日・光・季節
伊勢崎工業高等学校	〃	赤城山・妙義・榛名	利根の流れ		
伊勢崎商業高等学校	〃	赤城	利根	花	風・春秋
前橋東商業高等学校	〃	赤城の山		鈴の花・五弁のつじ	空・風雪・虹
境高等学校	〃			楓	赤城おろし・雪輪
玉村高等学校	〃	三つの山々	烏川・利根	桑の葉・花	朝風・雲・光
前橋高等学校(市立)	〃	山		樹々の緑	さ霧・ひかり・水・空・靑空・夜明け
伊勢崎高等学校(市立)	〃			けやき	空・風
桐生高等学校	東毛	あづまの山(吾妻山)	桐生の川(桐生川)	若松	水・霧
桐生南高等学校	〃	赤城嶺	渡良瀬	若草	朝陽

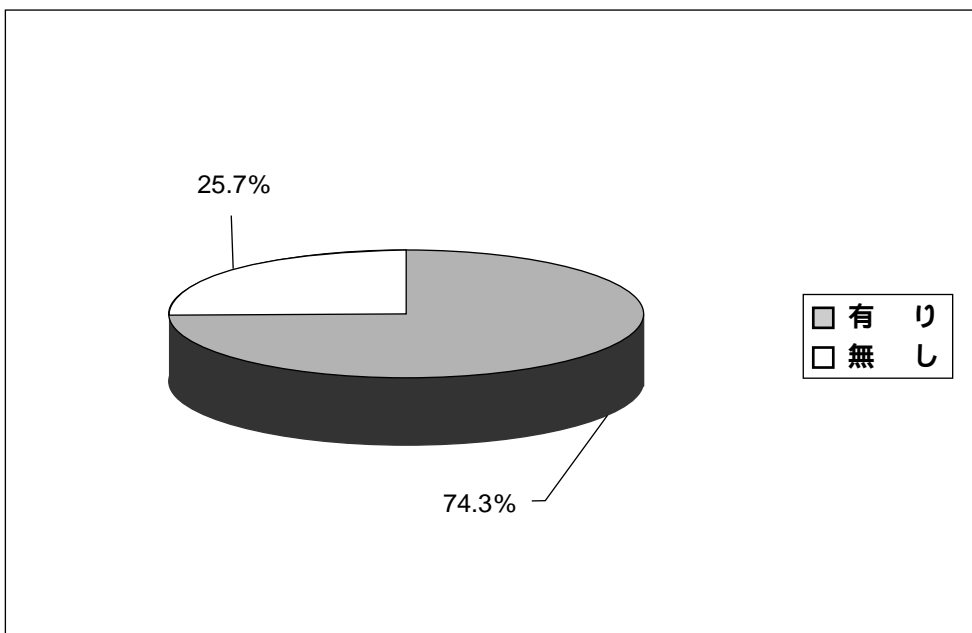
自然的ランドマークとその要件

学 校 名	地 域	山 (名)	河 川 (名)	植 生	自 然 現 象
桐生西高等学校	東毛	吾妻嶺	渡良瀬	若松・草・桐	朝日・雪・風
桐生女子高等学校	"	吾妻の山 (吾妻山)		花・草・桐の若葉	春霞
桐生工業高等学校	"	赤城	利根の流れ		朝日・夕日
太田高等学校	"	赤城・浅間	大利根 (利根川)		嵐
太田東高等学校	"	遠山なみ			空・春秋・朝かぜ・夕映え・朝日
太田女子高等学校	"	赤城の山	利根の流れ	松	雲
太田西女子高等学校	"	赤城	利根		風・波
太田工業高等学校	"	赤城・榛名	大利根 (利根川)	若葉・松	嵐
館林高等学校	"	名山		つつじ花	風
館林女子高等学校	"		利根の流れ	春の草・花	光・雨
新田暁高等学校	"	赤城嶺		春草	光・朝雲・靑空・四季
大間々高等学校	"	赤城の高嶺	渡良瀬の川		風・雲・朝・夕・春・秋・雨
板倉高等学校	"			梅・花	水
館林商工高等学校	"		沼面 (みずおも)		光
西邑楽高等学校	"	赤城嶺	大利根 (利根川)		光・大空
大泉高等学校	"	赤城の山 (赤城山)	大利根 (利根川)		光・天
太田市立商業高等学校	"	赤城山	利根		もや・日輪・天・春秋・四季
桐生市立商業高等学校	"	赤城・吾妻嶺	渡良瀬	花	空・光・風・雲・蛍雪

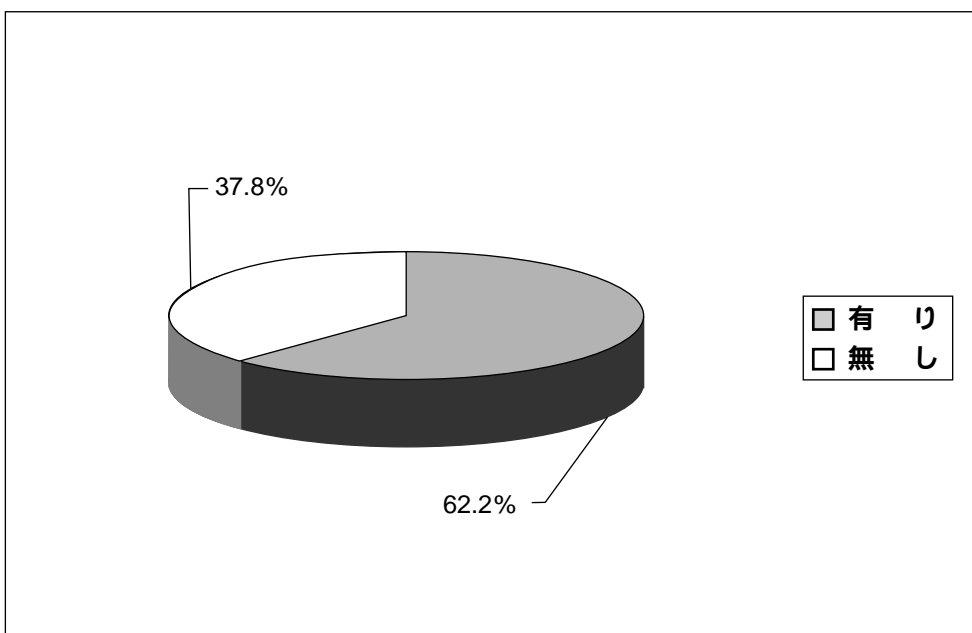


第1図 山(名)を校歌に含む高校

ことによって、歌う人と自然との一体感が得られるように配慮しているものと言えよう。なお、自然現象は抽象的に表現される例が多いものの、赤城嵐(中央高校、前橋高校、境高校)、三国おろし(沼田高校)といった群馬特有の自然現象を用いる例も認められる。とは言え、上毛かるたに歌われる「雷と空風 義理人情」の雷は群馬の自然現象として特徴的なものであるにもかかわらず、公立高校の校歌では全く使用されていない。雷のもつ激しさ恐ろしさが校歌には馴染まないのかもしれない。したがって、地域イメージを喚起する校歌の特性があるとは言え、ネガティブな自然的

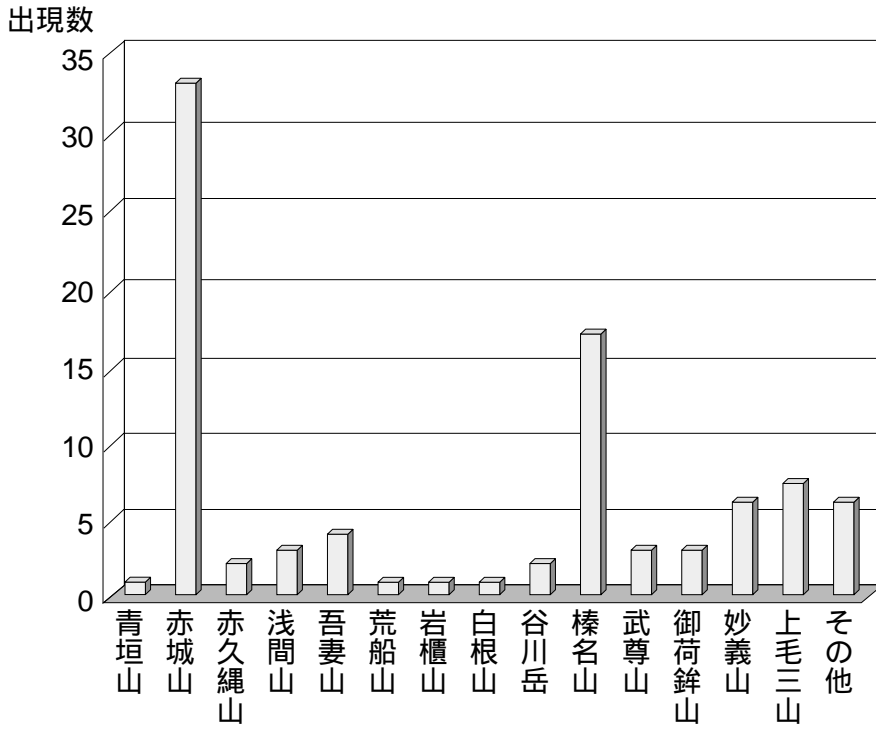


第2図 河川(名)を校歌に含む高校

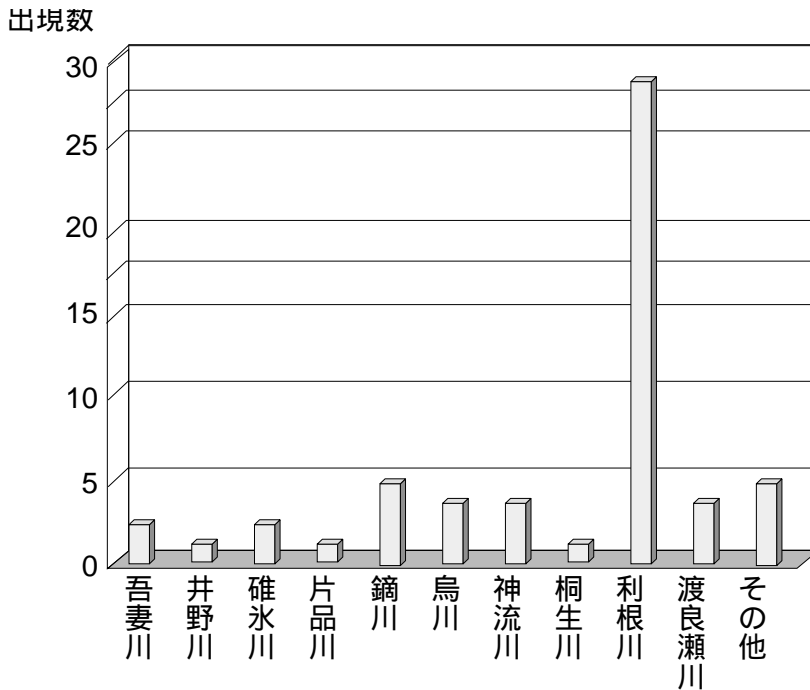


第3図 植生(名)を校歌に含む高校

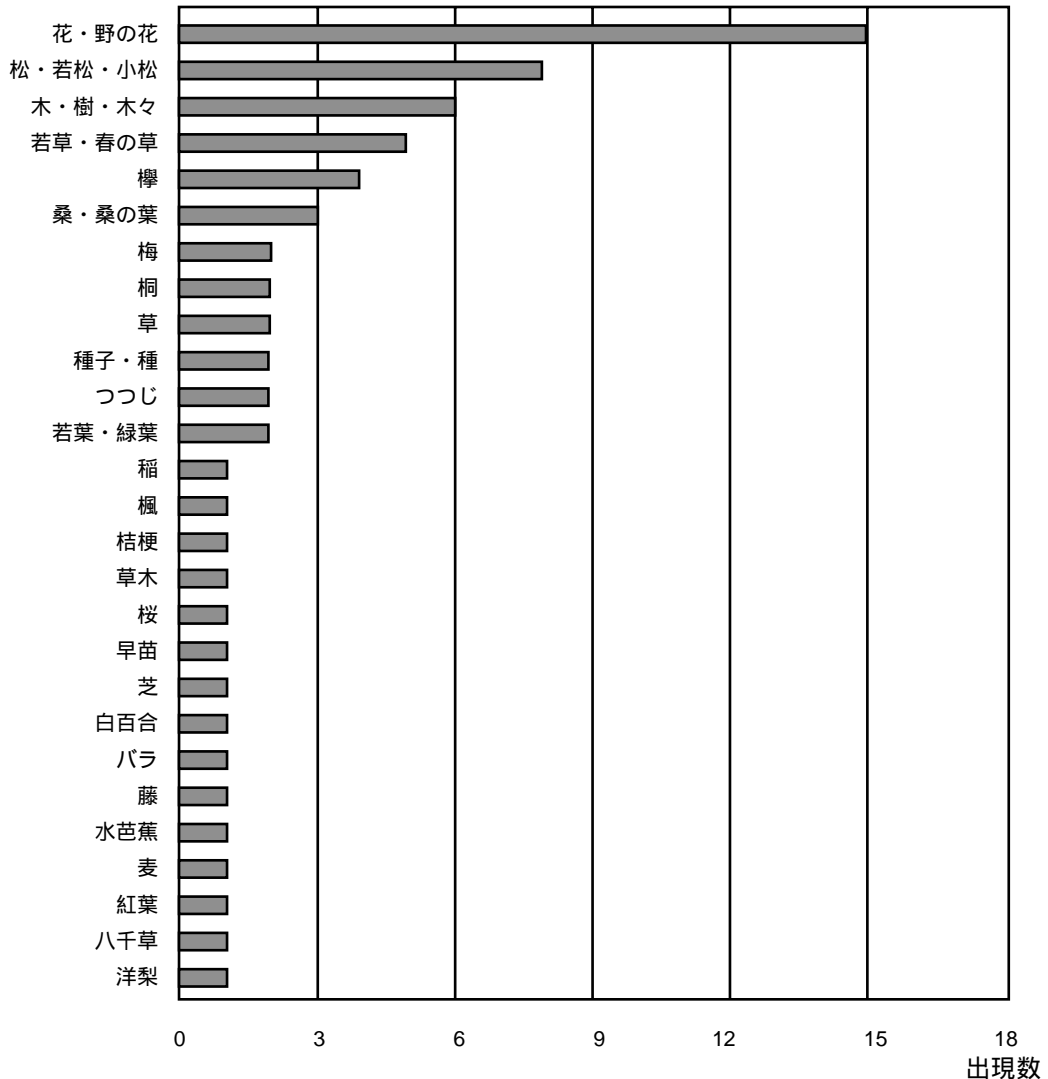
自然的ランドマークとその要件



第4図 校歌に歌われる山(名)



第5図 校歌に歌われる河川(名)



第6図 校歌に歌われる植生(名)

要素を用いることはほとんどないことも事実である。

その他には自然的要素をはじめとして、古代以降に用いられてきた地名の上野(かみつけ)、関八州、坂東や多胡の碑(藤岡女子高校)、碓氷峠(松井田高校)、厩橋(前橋高校)、大胡城址(前橋東商業高校)、大光院(太田女子高校)、躑躅ヶ岡(館林女子高校)など地域イメージ、コミュニティ・イメージを代表する事柄を用いて当該校の場所・位置の明確化をはかる例も多い。また、川を泳ぐ若鮎、空を飛ぶ若鳥といった表現で生徒達の若さを比喩的に形容することも多い。

このように、群馬県における公立高校の校歌のなかで自然的要素が含まれない例は皆無であり、群馬の自然を代表する山、河川、植生などが直接・間接に歌い込まれている。そして、自然現象としての大気や光、四季の変化などがアクセントとして用いられており、自然との関わりを密接に表

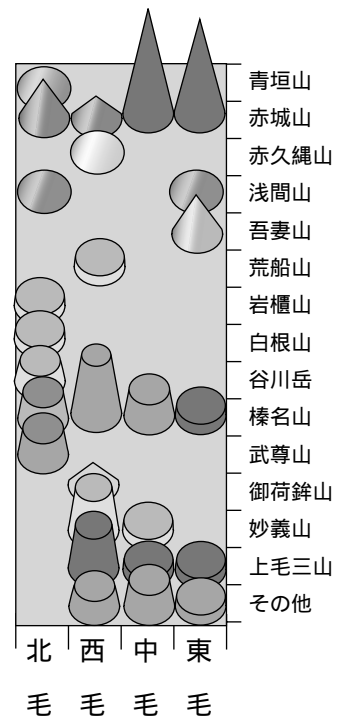
現することにより、当該校の恵まれた自然環境が強調される。言い換えれば、当該校にとってシンボルとなる校歌には他校との違いを明確にする必要と同時に、自然要素を取り込むことが不可欠であり、それらを通じて地域イメージ、コミュニティ・イメージが高められ、学校・生徒のアイデンティティ形成が図られていくものと言えよう。

b. 校歌と山

群馬県は関東山地をはじめとして、上越国境に位置する山々など、数多くの山が認められる。山はそのイメージ（雄大さ、聳え立つ、……）から、とくに若人の希望に満ちた未来と重ね合わせて用いられる例が多いものと考えられる。また、それは視認性の高さから遠くにあっても望むことができるため、広い地域から認識できる対象として位置づけられることも多い。したがって、公立高校の校歌にも9割以上、山名が用いられているのである。そして、上毛三山（赤城山・榛名山・妙義山）が用いられる例が多いことは先に述べたが、ここでは地域の違いが山の認識の違いに結びついているのではないかという仮説のもとに分析を試みた。なお、地域的な分析を行うために、各校を四毛（北・西・中・東）に分けてその出現傾向をまとめてみた（第7図）。

北毛は赤城山が最も多く、榛名山、^{ほたか}武尊山、谷川岳、浅間山、青垣山、^{いわびつ}岩櫃山、白根山の順となっている。武尊山、谷川岳は沼田地域、青垣山、岩櫃山は吾妻地域、浅間山は長野原、嬬恋地域の

山地(名)	北毛	西毛	中毛	東毛	合計
青垣山	1				1
赤城山	5	3	13	12	33
赤久縄山		2			2
浅間山	2			1	3
吾妻山				4	4
荒船山		1			1
岩櫃山	1				1
白根山	1				1
谷川岳	2				2
榛名山	3	8	5	1	17
武尊山	3				3
御荷鉾山		3			3
妙義山		5	1		6
上毛三山		5	1	1	7
その他		2	3	1	6
合計	18	29	23	20	90



第7図 校歌に歌われる山(名)(地域別)

学校で用いられており、それぞれの地域から望むことができる限定された認識対象と考えられる。すなわち、上毛三山といった広域のイメージとは異なるリージョナル、コミュニティレベルでの認識対象であり、地域アイデンティティを強調できる山と言い換えることもできる。北毛は主要交通路が山地の河谷に沿って延びており、それぞれの谷筋が当該地域の生活圏との重なりを強くもっている。こうした背景が人々の知覚空間の形成に結びついているものと考えられる。

西毛は榛名山が最も多く、妙義山、上毛三山、赤城山、御荷鉾山、赤久縄山、荒船山などが用いられている。西毛は高崎、藤岡、富岡、安中などの都市が分布し、藤岡地域の御荷鉾山、赤久縄山、富岡・安中地域の妙義山、下仁田地域の荒船山といったように、それぞれの地域から認識できる山と地域アイデンティティの重なりを認めることができる。西毛は北毛と同様に、山地部に向かう谷筋がそれぞれ異なることが知覚空間の差と結びついており、地域認識の差を生じているものと言えよう。

中毛は赤城山が大半を占め、榛名山、妙義山、上毛三山と続いている。中毛は前橋、伊勢崎、境町、玉村と関東平野に展開する地域であり、上毛三山の視認性が高い。そのため、上毛三山以外の山を用いる例は皆無であり、群馬の代表的イメージを用いることで地域アイデンティティも示されてしまうことがその背景にある。

東毛は赤城山が過半をこえ、続いて吾妻山、浅間山、榛名山、上毛三山となっている。東毛は桐生、太田、館林などが含まれている地域であり、中毛とほぼ同様な性格を有しているものと言えよう。その中では桐生がやや性格を異にする地域であり、関東平野の縁辺部に位置し上毛三山の視認性に恵まれないためか、近接する吾妻山を用いる学校が四校ある。

このように、山が歌詞に用いられる場合、当該校から視覚的に認識できることが前提であり、群馬を代表する上毛三山とくに赤城山、榛名山が用いられる例が多い。とくに平野部に位置する学校に顕著である。しかし、山地部に向かうと谷筋に従って認識可能な山が変化することにより、地域イメージ、地域アイデンティティと重なる山が用いられるようになることが明らかになった。それは、それぞれの地域に住む人達によって蓄積されてきた山のイメージともなっており、山を自然的ランドマークとして認識してきたことに他ならない。地域住民により日々認識できる山のなかで、とくに特徴的な高さ・形態・宗教性などが人々の心の中に印象づけられ、象徴的なランドマークとして位置づけられてきたものと考えられる。群馬県においては、地域性を捉える一要素として山の果たす役割が重要であることが理解される。

c. 校歌と河川

群馬県における河川は山地部において河谷を形成し、その大半の谷筋は交通路となるなど、人々の生活および空間認識の対象として重要な役割を果たしてきた。また、それらは平野に至ると合流し、利根川のような大河川となって平野を貫流している。校歌に歌われる河川としては利根川が圧倒的であるが、以下、地域的傾向について分析を加えてみたい(第2表)。

第2表 校歌に歌われる河川(名)(地域別)

河川(名)	北毛	西毛	中毛	東毛	合計
吾妻川	3				3
井野川		1			1
碓氷川		2			2
片品川	1				1
鐺川		5			5
烏川		3	1		4
神流川		4			4
桐生川				1	1
利根川	7	3	10	9	29
渡良瀬川				4	4
その他	2	1	1	1	5
合計	13	19	12	15	59

北毛では7校で利根川が用いられ、吾妻川が3校、片品川が1校となっている。山地部を流れる吾妻川も片品川も最終的に利根川に合流することになるが、水系の違いが明瞭に学校の位置と対応しており、他の谷筋を流れる河川名を使用する学校は認められない。

西毛では鐺川が最も多く、以下、神流川、利根川、烏川、碓氷川、井野川の順となっている。他地域とは異なり、利根川が少ないのはいずれも最終的には利根川へと流入することになるが、河川の上流部が樹枝状に分かれ、北毛と同様に河谷・谷筋がそれぞれ異なることによる。そのため、当該校の位置が対応する河川の相違となって現れているものと言えよう。

中毛は圧倒的に利根川が多い。わずかに玉村高校が烏川を用いているものの、同校も烏川とともに利根川を歌い込んでいることから、中毛地域では関東平野を流れる河川のイメージが利根川に集約されている。平野部では視野が広がることにより、当該校から利根川が距離的に遠くても、身近な存在として認知されてしまうものと考えられる。

東毛では利根川を筆頭に渡良瀬川、桐生川が使用されている。中毛と同様に関東平野に位置する学校が多いことが利根川へと結びつき、桐生地域に位置する二校や大間々高校がより近接した渡良瀬川を用いている。

以上のように、平野部・山地部を問わず大半の学校が利根川を校歌に取り込んでいる。坂東太郎といった表現とともに関東平野を滔々と流れる利根川は、ゆったりとそして力強さを象徴する対象としてふさわしいものと考えられるのである。また、その他の河川は利根川水系に含まれるものの山地部へ向かうとそれぞれ異なる水系となり、それらを認識できる地域が明瞭に異なっていく。すなわち、河川は山などとは違い、認識できる範囲が狭く、正確さが求められる歌詞においては当該校に最も身近な河川が用いられるのであろう。言い換えれば、河川は線的な認識対象として、水系がほぼ認識地域としてのまとまりをもっていると考えられることもできる。これは、群馬県の地域特性とも結びつき、利根川という骨格と、網状に各支流が山地部に向かい道路・集落立地と密接に関連

し地域イメージが形成されていくのである。

Ⅳ．おわりに

以上のように、群馬県の公立高等学校の校歌に用いられる歌詞のすべてに、自然的要素が盛り込まれていることが明らかとなった。そこでは山地部と平野部に展開する群馬県の地理的特性が反映され、特徴的な山や河川を用いる例が多かった。そして、当該校を取り巻く自然・人文的環境を明らかにすることによって、地理的空間における当該校の絶対的・相対的位置が示され、学校のアイデンティティが明確化されている。すなわち、校歌には当該地域の地域特性が内包される必然性があるといっても過言ではなからう。校歌という限られた表現の中で、作詞家達は若者の前途ある成長に期待し、当該地域の地域性を自然的要素を巧みに用いることで彼らの地域イメージの確立とアイデンティティの形成を促す。そして、校歌が数多くの場で歌い継がれることにより、地域イメージの蓄積と伝播が図られていく。今回、取り上げることができなかった小・中学校の校歌などは、より地域に密着したイメージを強調する形で作られていることが予想される。地域住民にとっては自らの成長過程と密接に結びつく小・中学校の学舎や校歌を強く認識し、自らの地域イメージとアイデンティティを作り上げていくものと考えられる。それらは‘故郷性’^{ふるさと}の醸成にも結びつくものなのかもしれない。もちろん群馬県以外の都道府県においても、海や島など内陸県には認められない特徴的な自然的要素が用いられることになる。

このように、自然環境を構成する自然的ランドマークは、さまざまな形で個々人の地域イメージを確立していく際に、大きな役割を果たしているのである。本質的に自然環境の形成に人間の力が及ぶことは少ないが、さまざまな自然的要素に対して人間は多種多様な感性でそれらをとらえてきた。とくに山や河川は人々の空間認識や地域イメージの形成に大きな役割を果たしてきた。景観を構成する要素として自然環境は必要不可欠なものであり、そこに含まれる自然的ランドマークは我々の生活や空間認知に対して重要な役割を果たしているのである。

(つがわ やすお・高崎経済大学地域政策学部助教授)

註

- 1) 志賀重昂(近藤信行校訂)『日本風景論』、1995、岩波書店、85～192頁。
- 2) 津川康雄『京都の観光要素』、立命館地理学5、1993、17～29頁。
- 3) 高野辰之(1876～1947)は長野県に生まれ、国文学の研究をはじめ「春の小川」、「もみじ」、「春がきた」など数多くの文部省唱歌を残した(おぼろ月夜の館 班山文庫 長野県野沢温泉村)。同氏は、太田女子高等学校、館林女子高等学校の校歌において作詞、作曲者として名を連ねている。
- 4) リンチ(丹下健三・富田玲子訳)『都市のイメージ』、岩波書店、1968、55～113頁。
- 5) 津川康雄『地表空間におけるランドマークとその意義』、立命館地理学9、1997、17～29頁。
- 6) 津川康雄『ランドマークの形成と地理的慣性 城郭を中心として』、高崎経済大学論集39-3、1996、21～42頁。
- 7) 津川康雄『宗教的ランドマークとその要件 大観音像を例として』、立命館地理学10、1998、

自然的ランドマークとその要件

49～58頁。

- 8) 津川康雄『宗教的ランドマークの成立過程 大観音像を例として』、地域政策研究1、1998、87～101頁。
- 9) 毎年春夏に甲子園で開催される全国高等学校野球大会において勝者に対する校旗掲揚・校歌斉唱がその典型例であろう。無意識のうちに校歌が多数の人々の記憶にとどめられてしまう。ただし、学校によっては校歌がさほど意味をもたず、応援歌などに学校のアイデンティティを感じる例もある。
- 10) 群馬県の公立高等学校は県立68校、市立5校、組合立1校の全74校である。
- 11) 群馬県民になじみの深い「上毛かるた」においては山として赤城山、榛名山、妙義山、谷川岳、金山、浅間山が用いられている。

付記) この研究をまとめるにあたり、1998年度高崎経済大学特別研究奨励金『ランドマークの諸要件に関する研究(研究代表者 津川康雄)』の一部を使用した。なお、資料収集にあたり、群馬県教育委員会の皆様にご配慮をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。